

卷頭言

『植物防疫』創刊 80 年目を迎えて

一般社団法人 日本植物防疫協会 理事長

はや 川 やす 泰 弘



謹んで新春のお慶びを申し上げます。昨年は 7 月の渴水・高温、8 月以降の大霖、記録的な猛暑による被害が続きました。被災された方々に対し心よりお見舞い申し上げます。病害虫の発生につきましては、斑点米カメムシ類が昨年も多発し、35 道府県から延べ 46 件という、この十年で最多であった一昨年を上回る数の注意報が発表されました。しかしながら適時適切に防除が行われ、米の価格や需給が全国的に話題となり続けている中で、病虫害によって収量や品質に悪影響が生じる事態にならなかつたのは喜ばしいことでした。

さて、本誌は今年で創刊 80 年目を迎えました。植物防疫分野の唯一の総合専門情報誌として、長きにわたり研究者や指導者を含む多くの植物防疫関係者の皆様に様々な情報を提供してまいりましたが、このたび、節目の年を迎えたことを機にあらためてその歴史を振り返ってみたいと思います。

本誌は、当協会と農薬工業会（現クロップライフジャパン）の前身である農薬協会が設立された翌年の 1947 年（昭和 22 年）4 月に、誌名を『農薬』として創刊されました。農薬協会は、優良な農薬を農家に提供し食糧増産に寄与することを目的として設立された団体で、その機關誌である『農薬』は、「防除の知識を普及し農薬使用の技術向上を図る」ことが期待されていたと創刊号に記述があります。その後、1950 年（昭和 25 年）の第 4 卷から誌名が『農薬と病虫』に変更されました。1951 年（昭和 26 年）の第 5 卷 7 月号からは、それまで農林省植物防疫課が発行していた植物防疫に関する行政情報を掲載した『防疫時報』（昭和 25 年 10 月発刊）と合併し、現在の誌名である『植物防疫』となっています。

1953 年（昭和 28 年）に、農薬協会が「日本植物防疫協会（以下「日植防」）」と「農薬工業会」に分離・独立しましたが、『植物防疫』は同年 6 月号から日植防に引き継がれました。直後の 7 月号では、「『植物防疫』の再発足」と題し、堀正侃（ほりまさあきら）植物防疫課長（編集委員長）が、「『植物防疫』は我が国唯一の専門雑誌として大きな役割を持っていたが、過去においては必

ずしも読者の期待に応え得たとはい難かった。再発足にあたって、行政、研究、普及、防除実施、農薬、防除器具等、内外を問わず、学校・研究機関・団体・会社・個人いざれを問わず、その資料を解説し、情報をのせ、学者・研究者・指導者・進歩的な農家等誰が読んでも参考となり、『植物防疫』さえ手にすれば、植物防疫関係の全般を知り得る雑誌にしたいと考えている」旨の抱負を述べておられます。この抱負が、本誌の理念としてその後現在まで脈々と受け継がれていると感じています。第 72 卷（2018 年）からは、体裁をそれまでの A5 版モノクロから A4 版フルカラーに変更するとともに、幅広いジャンルを網羅する編集方針や積極的な寄稿を促す掲載規程の策定等の刷新が行われ、現在に至っています。

この機会に創刊号から 79 卷までの各号の目次に目を通してみました。目次を読んだだけでも戦後の植物防疫の流れやその時代時代の課題、その解決に向けた対応・対策の進展等に関する膨大な歴史を感じ取ることができました。一例として IPM を挙げますと、このテーマに関しても、長年にわたり様々な観点や角度から検討・考察を加えた多数の論文が本誌に掲載されています。その経過を追ってみると、我が国における IPM に関する様々な技術の進展等を伺い知ることができました。最近、「みどりの食料システム戦略」や「改正植物防疫法」によりあらためて IPM がクローズアップされていますが、このような技術の進展等があつて初めて、IPM は現在現場において普及可能になりつつあることを実感できました。

このように、本誌が長きにわたり広範かつ膨大な内容の刊行を続けることができたのも、ご執筆・ご寄稿いただいた数多くの植物防疫関係者と貴重なご助言をいただいた歴代の編集委員の皆様の一方ならぬご協力とご尽力の賜物であり、あらためて深く感謝申し上げる次第です。

本誌創刊 80 年目を迎えた年頭にあたり、本誌の歴史と意義を再認識し、今後ともその使命を果たすべく誌面の充実に努めていくことについて、思いを新たにしたところです。本年も一層のご支援をお願い申し上げます。